終わりは何時来るのか・・・（仮）

藍猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わりは何時来るのか・・・（仮）

【Ｎコード】
Ｎ３４４８Ｚ

【作者名】
藍猫

【あらすじ】
親に見捨てられて親友に裏切られてイジメを受けていた私・・・浅野季莉（あさのきり）は屋上から飛び降りて自殺する。が、それは未遂で終わってしまう。
動きにくくなった左腕と共に、私は一からやり直す為、遠くの学校へ転校することになる。だが、そこは、狂った者達の巣窟だった。

＊Ｒ１５は一応です・・・

始まりの悲劇（前書き）

ふと書きたくなって書いたホラー系の小説です。
ホラーなのかよく分からなかったりしますが、
読んで下せると嬉しいです。。。
勢いで書いたので
話の流れがおかしかったりしたらすいません。。。

始まりの悲劇

「死ね」

その簡潔な、そして残酷な言葉が投げかけられた。
私はきっと酷い顔をしていただろう。
今まで似たような事は言われ続けてた。
だが、これほどに直球に言われたことはなかった。
だからこそ今まで頑張って生きることができたんだと思う。

いくら酷い事をされても必要とはされている、と思って頑張ってた・・・。

なのに・・・なのに・・・。

たった一言で私の心は粉々に砕け散った。

ああ・・・私はなんの為に生きているんだろう・・・。

日に日に私はやつれていく。
皆はそんな私を笑う。
嫌いな人も、好きだった人も、信じていた人も・・・すべての人が。

・・・嫌い。皆、嫌いだ。

皆・・・皆、嫌い。嫌い。嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い！嫌いだ

っ！！！

「あは・・・あはははははは！！」

学校の屋上で高笑いする。

私を押す様に風が吹き、私はその風に身を委ねて飛び降りる。

グッシャアア！

身の毛も弥立つ様な気持ち悪い音が響く。

最後に見たのは不自然に折れ曲がった左腕。

あぁ・・・もうこの左腕とは駄目だな・・・。

……当たり所が良かったのか痛みも感じない。

「・・・やっと・・・死ねる・・・。」

フッ　と私の意識は途絶えた。

ここ最近感じなかった安堵の気持ちはとても落ち着いていて心地が良かった。

始まりの悲劇（後書き）

意外と考えるので
大分更新が遅いと思います。。

ここまで読んでくださってありがとうございました！！

暗雲の始まり（前書き）

2話目です。。。

暗雲の始まり

「初めまして。私、浅野季莉(あさのきり)って言います。
前の学校では『きり』って呼ばれてました。これからよろしくお願いします。」

私―――浅野季莉はやり直す為に転校してきた。

あまり激しく動かすことができない左腕は今だ固定されたままの状態だ。

私はあの時、死ねなかった。

誰も必死で生かそうとも思っていなかったのに、私は生き残ってしまった。
死ぬつもりで飛び降りといて、誰も望んでもいないのに生きてるなんて・・・
笑いが込み上げてくるぐらいに私は滑稽だっただろう。

いや・・・今でも私は滑稽だろう。

前みたいになるのが嫌で、自分を偽り、新たに友達と成るであろう者たちを

騙そうとしているのだから・・・。

新たな学校でのクラスは私を除き、約１５人のクラスだった。
その全員が、何かに失敗し、それをやり直す為にこの学校に居るらしい。
謂わば、問題児の集まる学校という事だ。
そのクラスメイトがまともなはずがない。
だから標的にされない様に、私は仮面を被る。
そうすればきっと、前みたいにはならないから・・・。

このクラス・・・２年Ａ組のクラスメイト達は黙って私を観察し続ける。
全員が揃って死んだような虚ろな目をしていることに、
普通じゃないと物語っている様な目に、私は恐怖を覚えた。
そして、それと同時に、この人達なら大丈夫という安堵もあった。
前のクラスメイト達はニヤニヤとした厭らしく、そして蔑む様な目だったから・・・。

だが次の瞬間、その目は・・・空気は一変した。

「わぁ！こちらこそ宜しくね、きりちゃん！！」
「きり？だっけ？　これから宜しく！！」
「やったー！転校生だぁー！！」
「結構可愛いじゃん♪」
「宜しく～～。」

静寂に包まれていた教室は一気に明るく、騒然となる。
誰もが嬉しそうに叫び、絶叫している。

「は・・・はは・・・・。」

私は驚愕から覚め、微かに体を震わしながら小さな声で笑う。
この変わりように驚き、変な違和感があったが、
でもそれ以前に、私が受け入れられた事が嬉しかった。
誰にも受け入れられず孤独に生きていた私が受け入れられたことが・・・。

私はここで生きる理由を見つけることができるかも知れない。
心から大切にできる人ができるかも知れない。
前向きに、力強く生きれるかも知れない。

「・・・うん。　宜しく・・・・！」

私は久しぶりともいえる心からの笑顔で、出そうになっていた涙を隠す。

私は涙を隠している事がばれるのが恥ずかしくて誰とも目を合わさなかった。

でも、もし目を合わせていたら私はきっと気付くことができただろう。

クラスメイト全員が私が恐れていた目をしていた事に。

そして私は気付くべきだった。

最初に感じた違和感に。

今でも死んだような虚ろな目の先生に。

そして、この学校は、

普通じゃない問題児達(くるったものたち)の巣窟ということに・・・。

気付けていたら・・・あんなことにはならなかったかな・・・？

暗雲の始まり（後書き）

最初は和やかめです。。。

狂気の遊戯（前書き）

ためてた3話目です。。。

狂気の遊戯

「帰えろ～きりちゃん♪」
「あ、私も一緒に帰っていいですか？」
「うん。一緒に帰ろ！　香緒(かお)ちゃん、緋乃美(ひのみ)ちゃん！」

授業が終わると同時に話しかけてくる二人――――満瀬香緒(みちせかお)と、
秋原緋乃美(あきはらひのみ)は一番最初の友達になった人達だ。

転校初日はクラスメイト全員が質問攻めの殺到をしてきたが、
この二人だけはそんな困っている私を庇ってくれて。
前の学校でのトラウマによって人と話すのが怖い私には、
そらは願ってもない助けだったのだ。

クラスメイト達は、助けられて安堵している私を見、直ぐに撤退しだした。

それから何日経っても質問しなくなったのは私の心を察してくれたからだろう。
たまに気遣う様な言葉を言われるが、慣れてない私は軽く受け流すしかできなかった。

今はもう転校してから二ヶ月が経つ。

「――で、・・・って聞いてる！？きりちゃん！？」
香緒が勢い良く私を振り返る。香緒が何か話していた様だが、
物思いに耽っていた私が聞いているはずもない。
「あ・・・ごめんごめん。聞いてなかった。」
あはは　と誤魔化す。
「・・・もう。全くきりちゃんったら。」
緋乃美が何時もの様に優しく注意する。
「でも・・・そんな所が私の好きなきりちゃんって所ですけどね。」
緋乃美はたまにこういう問題発言をする。

最初の頃は冗談だと思っていたが、たまに本気なんじゃないかという
うような行動を
見せるときがあるので、言い出したら頑張って話を逸らせようとする
るのが最近の私だ。

でも最近の緋乃美はおかしく、今の緋乃美は既に常軌を逸していた。

「あ、えと・・・そういえば最近さぁ――――」

「どうして話を逸らすんですか・・・？」

何時になく冷たく、静かで、冷徹な、鋭い声が聞こえた。

「・・・え？」
体の体温が急激に下る様な悪寒を感じ、緋乃美の顔を窺う。
長い前髪で隠されて表情を見ることはできない。
でも、少しして、微かに見える口元の先端が弧を描くように吊り上がるのが見えた。
否、見てしまった。

「ひ・・・緋乃美ちゃ・・・ん？」

トラウマとして残るあいつらの笑いより何倍も恐怖を覚える笑顔に、
私の声は掠れ、
それが言葉として相手に伝わったかは定かではない。
だが、それは伝わり、緋乃美は顔を上げる。

ゾワッ

綺麗だった緋乃美の顔は醜く歪み、笑みを刻んでいた。
それに反応し、体中の鳥肌が立ち、体が・・・私のすべてが拒絶した。

嫌だ・・・嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だっ！！！

「ひ・・・いやぁ・・・。」

「あれ～？どうして退くんですか～？酷いですね～、きりちゃん～？」

差し伸ばされた腕を反射的に払い除ける。
緋乃美は笑みを浮かべたまま其処に硬直する。

「・・・どうして？どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてーー！！！？？？
きりちゃん！きりちゃん！きりちゃん！きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり、きりちゃーーんっっ！！！」

笑みを失くし、完全に歪んだ面持ちをした緋乃美は叫ぶ。
その鬼気迫る様な緋乃美の目には既に光がなく、何も映していなかった。

「いや・・・っ。いやぁーーー！」

私は、常軌を逸した緋乃美に背を向け、振り返らずに走り出す。

怖い怖い怖い怖い！！

私は家のベッドの上に体を丸めて蹲る。
あれが緋乃美ちゃんなの！？
あんなのが・・・。

私は震えたままベッドに倒れこみ、何時しか寝てしまった。

「・・・あ～あ。もう壊れちゃったかぁ～。」
「まぁ結構持ったよね。この子。」
「どうするの？これ・・・。」
「さぁ？捨てておいたら？」

「・・・き・・・り・・・・・ちゃあぁ・・ぁぁ・・・・・ん・・・・。
」

「あれ？まだ生きてるよ。」
「あはは。しつこ～。」
「早く殺しちゃいなよ。」

ズシャア・・・

「・・・ぁ・・・ぐぁ・・・・・・・・・・」

「やっと死んだよ。」
「うざかったね～。」
「・・・次のあの子はどれ位持つかな？」
「ああ・・・あの子。・・・楽しみだね～。次はどうやって遊ぶ？」

くすくす　あはははは

暗闇で響く会話は何時しか消えていった。

「・・・くす。お疲れ様～。緋乃美ちゃん♪」

香緒の声も直ぐに消えて誰にも聞こえなかった。

狂気の遊戯（後書き）

ということで
一人増えて一人減ったので
２年Ａ組は変わらず１５人ということになります。。。

虚無な存在（前書き）

話作るのたいへんです・・・（汗）

虚無な存在

「おはよ～きりちゃん！」

朝の通学路で香緒に声を掛けられた。

ビクッ　と背を震わせたが、相手を見て、私は落ち着きを取り戻す。

「お・・・おはよう、香緒ちゃん。」

「・・・？どうかした？隈があるよ？」

「あ、ああ、と・・・。昨日眠れなくて・・・。」

「昨日？何かあったっけ？」

「・・・え？」

「？まあいいや！さっさと学校行こ～♪」

陽気に語る香緒は前を歩き出す。

どうして・・・？

昨日、緋乃美ちゃんがおかしくなった時、一緒に居た筈なのに・・・。

まさかあれが普通なの？あの緋乃美ちゃんが素なの？

「き、昨日さ。緋乃美ちゃんなんかおかしくなかった？」

気まずくならない様にできるだけ明るく問いかける。

心臓がバクバクと五月蝿く鳴る。聞いてはいけないと警告する様に。

「・・・？緋乃美？誰それ？」
香緒がキョトンとして答える。
「え・・・？」
緋乃美と香緒はいつも一緒に居て仲が良かったはず。
なのに・・・知らない？
「？まぁいいや。早く学校行こ～！」
香緒が私の手をとって走り出す。

ゾワ

急に嫌悪を感じたが手を振り払う事が出来なかった。
香緒の手には力が込められており、外れなかったから。

ガラッ

何時もの様に教室へ入る。
私は何とか香緒の手から逃れ自分の席へと腰を下ろす。
私の席は一番後ろの窓側。
香緒の席は同じ列の一番前。
そして、緋乃美の席は・・・
「・・・え？」
――――なかった。
私と同じ一番後ろの席の通路側。
そこに在るはずの緋乃美の机がなかった。
「っ！？　ねぇ緋乃美ちゃんの席は！？」
隣の席の男子湖山尚志（こやま なおし）に勢い良く問いかける。
湖山は男子にしては長い前髪を除けて私を怪訝な顔で見、口を開く。

「何言ってんの、浅野さん？あそこには前から席はないよ？
それに『緋乃美』って・・・そんな人、このクラスに居たっけ？」

「！！」

湖山の言葉に驚愕し、迂闊にも筆箱を落としてしまった。

バラバラバラ

私は慌てて散らばったペンを拾い集める。
湖山も「おいおい。大丈夫か？」と言いながらペンを拾い出す。

――――緋乃美がいない。まるでもともと存在しなかった様に・・・。

私は昨日の緋乃美の強烈な変貌の時のように、嫌悪感とかつてない不安を覚えた。

・・・怖い。

緋乃美の変貌・・・存在がなくなった緋乃美・・・。
私は正体の分からない謎に恐怖した。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い・・・

「きりちゃん？」

ビクッ

その聞きなれた声に私は恐る恐ると目線を声の方へと向ける。
「ほら湖山くんが拾っくれたよ？」
香緒がニコリと笑って直された筆箱を差し出す。
そうだった・・・。お礼を言わないと・・・。
青ざめたままだが私は湖山にお礼を言おうとして前を見ると・・・。
・・・今まで笑うところを見た事がない湖山は笑っていた。
何が面白いのか満面の笑みで。
そして香緒もにこにこと笑っていた。
その二人の笑みは、緋乃美が昨日に見せた笑顔と重なり、
私を恐怖へと突き落とす。
「ひ・・・緋乃、美ちゃ・・・ん・・・。」
まるで其処に緋乃美が居るように錯覚し、
私の恐怖は更に膨れ上がった。
どうして緋乃美ちゃんはあんなのになったの・・・？
どうして緋乃美ちゃんが存在していないの・・・？
どうしてこの二人は笑うの・・・？
・・・怖い怖い怖い怖い・・・。
・・・怖いよぉ。

私はそのまま意識を手放した。

「気絶したね。」
「このまま狂っておいたほうが楽なのにね。」
「気絶したのは良かったよ♪　だって違う遊び方ができるもんね。」

クスクス

私はそんな会話を聞いたような気がした。

虚無な存在（後書き）

まだ三人目のクラスメイトです。。。
全員の名前は徐々に出していく予定です。

序章の苦痛

「・・・ここは・・・？」
「あ、起きたのきりちゃん！？」
「・・・香緒ちゃん・・・・。」
「ここは保健室だよ？覚えてる？きりちゃん気絶したんだよ？」
「・・・き、ぜつ・・・・。」

私は回りにくい頭を回して思い出す。
「えっと・・・湖山君と話して、筆箱を落として・・・それで・・・・
あっ！」
そうだ。
私は緋乃美ちゃんを思い出して気絶したんだっけ！？
今はもう思い出しても大丈夫だけど・・・。

「ご、ごめんね。香緒ちゃん！迷惑だったでしょ！？」
「ううん！全然迷惑じゃないよ！！友達なんだしっ！！」
「え、友達？」
「ちょ・・・ひど（笑）・・・私は友達のつもりだったけど・・・
違う？」
「！　ううん！全然！　ありがとね！」

友達なんて言ってくれる人は居なかったからとても嬉しい。
・・・でもその反面、私は怖いとも思っていた。
裏切られることもだが、それ以上に皆の異常さが。

その無邪気そうな笑みは、誰に向けているの・・・？

そんな自分でもよく分からない疑問があった。
ただ、香緒だけじゃなく、皆の目に、私は映っていないように思えたから。
それは・・・気のせいかも知れないが。

ふと辺りを見回し、気になったこと聞いてみた。
「・・・ねぇ香緒ちゃん。保健室の先生は？」
カーテンが閉まっているから内側に居る香緒しか見えない。
香緒は私の様子を見ていてくれてたのだろうが、それは普通は先生の役目なんじゃないのか・・・？
そう疑問に思っての質問だった。
「・・・あー。先生ねぇ？　・・・さぁ？どっか言ったみたいだよ！？」
「・・・？そうなんだ？」
香緒の答えは少し歯切れが悪くて気になったが、気にしないことにした。

「あ、そういえば！」
「！？　急にどうしたの！？」
帰り道、静寂を急に破った香緒に　ビクリ　とする。
「あのね～。きりちゃんが寝てる間にね、クラスで面白いことが決まったの！！」

「！！　へぇ・・・。何々！？」
面白い　という言葉に反応し私は笑顔で香緒に聞く。
だが、次の言葉を聞いたとき、私の笑顔は一瞬にして消え去った。

「『イジメ』をすることにしたの！！　クラス全員で♪」

「・・・え？」
私は香緒の言葉が理解出来ずに硬直してしまった。
香緒ちゃんは何を言った・・・？
『イジメ』・・・？
香緒ちゃんはそう言ったの・・・？
クラス全員で、って・・・。
・・・ウソ・・・。

「？　どうしたの？きりちゃん？
気にしなくてもきりちゃんじゃないよ？」
「ほ・・・ほんとっ！？」
『私じゃない』その言葉に私は心底ホッ　と安堵した。

だが、それはトラウマだ。
まだドキドキと動機が激しい。ついでに息も荒い。
その様子を不思議そうに見ていた香緒は不意にニヤリと笑う。
恐怖してしまいそうな怪しい笑みを。

「勿論、きりちゃんもイジメるんだよ？」

イジメの恐怖を知っている私には、それを強制してやらされるというのは
苦痛以外の何ものでもない。
なのに『やれ』、と。

嫌だ・・・・。

でもそんなことを言えば私がまたイジメられてしまう・・・・。

香緒の笑みが更に深まった。

「さぁ。楽しい時間の始まりだよ？」

私の苦痛の日々が始まった。

でも、それは彼らにとっては始まりの一歩でしかないというのに・・・・。

序章の苦痛（後書き）

と、いうわけで
イジメが始まります。。。

狂う愚か者と歯車

「・・・聞こえるよ。聞こえるよ。悲哀なる声が・・・・。」
「聞こえる・・・。苦慮し、嘆く声が・・・・。」
「静寂の中、教会で懺悔するような哀れな嘆き声・・・・。」

「「「ああ・・・なんて心地良いの・・・」」」

「・・・っ！　ひ・・・酷い・・・・。」

学校へと着いた途端、私はそう呟く。
教室の前で蹲るのは標的となってしまったクラスメイト――――由利（ゆり）
篭由愛（かごゆめ）
という無口な少女だった。
何時もの艶やかな、肩で切り揃えられた黒髪は、塵を含んだ汚い水を滴らせていた。
手前にはその水が入っていたであろうバケツが無造作に転がっていて、倒れたまま放置されていた。

由愛は蹲ったまま動かず、扉の前を占領している。

昨日私は香緒に標的の人のことを聞いていた。
ただ暇潰しでやる事になったゲーム―――イジメの標的は、その日、
たまたま休んでいた
という由利篭由愛に決まった、と。

今まで休んだことがないと聞いたことがある人が、その日たまたま
休みで、
たまたまその日に決めたゲームの標的にした・・・。

偶然にしては計画されていたような説明振りに、私は　ゾッ　とした。
最初から決めていたんじゃないのかと・・・。

由愛は昨日休みだったから標的になったことを知らない。
きっといきなりのことでショックを受けて、動けずにいるのだろう。
だが、由愛は少しして普通に立ち上がり、何時ものように席へと向かった。

「・・・由愛ちゃん・・・。」

私に出来るのは優しく見守るだけ・・・。
それが私に出来る精一杯だから。

「本当に？」
「！！」

後ろからの低い声はついさっき離れたはずの香緒だった。

私より身長が低いため、必然的に香緒が私を見上げる形になる。
・・・なのに、香緒の目は私を見下ろしているように錯覚してしまうほど、虚ろな目だった。
嫌悪感を覚え、無意識に一歩退く。

それよりも、私は声に出していたの・・・？

「ねぇきりちゃん。きりちゃんはさ、何でこの学校に来たの？」
「っ！」

それは・・・聞かれたくない！言いたくない！知ってほしくない！
折角出来た友達に、裏切られたくない！聞かないで聞かないで聞かないで！！
私を・・・私の人生を壊さないで！！

「・・・答えたくない、と？　でもね、皆、知ってるんだよ？　クスクス。」

「！！　え・・・だって・・・そんな・・・！？」

知っているはずがない。
だってちゃんと親には口止めを頼んだし、この学校の校長にだって・・・。
どうして・・・！？

「プッ！あはははははは！　何故知っているかって！？　別に変なことはしていないわ！
ただ普通にきりちゃんの親に聞いただけ！

もともと親から見離されてたんでしょ？　きりちゃんの親は普通に教えてくれたよっ！？」

そんな・・・。でもあの人たちはちゃんと、初めて、約束してくれた。

・・・嘘だったの・・・？

私はまた裏切られたの・・・？

私は絶望のどん底に突き落とされた気分だった。

目で溜まっていた涙が頬を伝って零れ落ちる。

・・・もしかして、イジメをすることになったのって・・・。まさか・・・！

「やっと気付いて！？　このゲームはきりちゃんのために皆で考えたものなんだよ！？

あは、あはははははははははははははは！！」

「・・・ひっ！」

香緒の表情が崩れていく。

あの時の緋乃美ちゃんの様に・・・。

私はまた裏切られたの・・・？

いや・・・違う。

皆最初から友達なんかじゃなかったんだ！！

最初から・・・皆！！

怒りへと変わった恐怖は一瞬で私を包み込んだ。
怒りを込めて香緒を・・・皆を睨む。
「！」
皆は・・・
笑っていた。

「あはははははははははは、はひいっひ・・・きゃはは！！」
「くはっ！はは、あっはははっははははははｈっはｈ！！」
「くひひ・・・ひひはははは！！」
狂ったように皆が笑う・・・嗤う・・・哂う。
怒りへと変わった恐怖はまた恐怖へと戻った。
「い・・・ぃやあ・・・いやあぁぁぁぁぁぁぁ！！」
私は香緒を突き飛ばし、走る。
唯一の安心できる場所――――家へ向かって。

「くす♪　まだ終わりはないよ？　きりちゃん♪」

背後から最後に聞こえたのは不気味な笑い声と香緒の歪んだような声だった。

狂う愚か者と歯車（後書き）

哂う、嗤う、笑う
の違いがよく分からなかったりします・・・（汗）

滑稽なる懺悔

「はっ、はっ、は、くぅ・・・。」
私以外誰もいない暗闇の部屋で、私は蹲っていた。
真剣に走ったからなのか、それとも恐怖のあまりか、なかなかまともに呼吸が出来ない。

・・・皆が笑ってる・・・・。

見てる・・・見てる・・・私を・・・見てる!!

私を見て笑っている!!

「ご・・・さい・・・なさい・・・ごめんな、さいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

両手で自分を守るように頭を抱える。

変わらない・・・・。あの時と。

・・・あぁ、やっぱり私は変われないんだ・・・・。
最初からやり直すなんて出来なかったんだ・・・・。

私は・・・生きてていいのかな？

あの時と同じことを考える。
だが、少し違う。
だってあの時は考えただけじゃなくて実行したんだから。

怖い・・・

また同じ道を辿るの？

いや・・・それ以上の道を・・・。

あのクラスメイト達の笑い声を思い出す。
狂った様な笑い声を、あの醜く歪んだ表情を・・・。

「・・・っ！　ひぃっ！！」

自分で思い出しておいて、か弱く、情けない悲鳴が漏れる。

・・・あいつらはいつ来る？

何の確証もなく私はそう思った。
ただ、そんな気がしてならないのだ。
あいつらはいつか、私の道を途切れさせる、と・・・。

でも・・・

私は変わるために・・・強くなるためにここに来た。

だから

あんなやつらに負けられない・・・負けたくない！！

むしろ私があいつらに恐怖を与えてやる！！

「っ。　来るならきなさいっ！　私は　まけない！！　もし来るのなら、私は、あなた達を――――！！」

「あは♪　何をしようっての～？　き～りちゃ～ん？」

「！！！」

ゾワァァ

と、血の気が引いていくのが分かった。

それは驚いたからなのか、それとも、純粋なる恐怖からなのか――。

その声は間違いなくあいつら内の一人――――香緒の声だった。

「なっ、っ、はっ　はっ・・・。」

決意によって静められていた恐怖が湧き出して、呼吸が荒くなる。
「あれあれ～？　汗だくだよ、きりちゃん？　何か怖いことでもあった～？」
後ろから妙に明るい声がし、冷たい何かが首を包み込んだ。
今は秋。クーラーも暖房もつけていない快適な温度の部屋のはずなのに酷く寒く感じる。
それに、香緒の手はまるで氷の様に・・・死人の様に冷たかった。
「・・・ねぇきりちゃん？」
「な・・・に？」
急に静かで冷たい声になったのにビクリとする。
香緒はゆっくりと時間をかけながら首を撫でる。
「・・・きりちゃんは、人は変われると思ってるの・・・？」
「・・・」
その問いかけは、今も昔も、ずっと悩んでいる問題だ。
沈黙しつつも私は悩み続ける。
・・・そうだ。私はさっき決意をしたじゃないか！
負けない、と――――変わってみせると！
「人は・・・変われる！」
私はそう断言した。
そう、人は変われるものなのだ。だから、きっと香緒も・・・クラ

スメイト達も・・・変われる！

「・・・きりちゃんはそう思うんだ・・・。」

私の言葉に、少し悲しそうに香緒が呟く。
その小さな呟きに私は、分かってくれた　と安堵した。
次の瞬間まで・・・。

「・・・・・・・・・・あはっ♪」
「つっ！？」

香緒の爪が首に食い込む。
「い・・・た・・・。」
少しずつ、どんどんと食い込んでくる。
ポタリ　と何かが落ちた濡れた音がした。
それを横目で確認する。

紅い・・・血。
私の血！

「香緒ちゃ、ん！やめ・・・て。い・・・たい。」

痛さのあまり目が霞みだす。

「そう！　人は変われる・・・変わるんだ！！」
香緒が叫ぶ。楽しんでいるような狂喜の演説。

「そうでしょきりちゃん？　人は変わる。　あの緋乃美ちゃんのように！！！」

「！？」

緋乃美ちゃんが変わった・・・？

香緒は哂う。私は震える。緋乃美ちゃんは・・・・・。

滑稽なる懺悔（後書き）

話の流れが分からない・・・（汗）

冷徹なる言霊（前書き）

サブタイトル・・・何とか話と関連付けようとしているんだけど・・・

難しい・・・

冷徹なる言霊

「緋乃美ちゃんはきりちゃんみたいな子だったんだよ～？」
「・・・」
香緒がクスクスと笑いながら囁く。
嫌悪感は絶頂の位置から動かずにいた。
「・・・緋乃美ちゃんも転校生。きりちゃんの様に。」
「可愛くて親切で誰に対しても優しくていい子だったよ。」
「そういえば捨て犬を見て泣いてたっけ。」
「軽く皆に無視されても笑顔を崩さない子だったなぁ。」
「ばらばらだったクラスメイト達を一つにまとめようとも頑張ってたなぁ。」
香緒が一人で緋乃美の話を続ける。
それは思い出で、感情で、言葉で、・・・大切な記憶。
香緒から紡がれる思い出は唄のように流れていく。

安らかそうに見えても首に込められる力は一向に緩まない。
それどころか、言葉を発する度にきつくなっていく。
白い首から流れる紅い血は、香緒に指を伝い、床へと消えていく。
「・・・あれ？緋乃美ちゃんは今、何処行ってるんだっけ・・・？」
ちらり　と香緒の表情を覗く。
「っ！？」
香緒は真っ青な顔をしており、まるで私を見ていなかった。
目は死んだように虚ろな黒い瞳をしており、ボー　と天井を見ていた。
・・・普通じゃない・・・。
汗が頬を伝う。
「あれあれ？　緋乃美ちゃんはぁ？　ねぇ何処行ったの？　緋乃美ちゃ～ん？
・・・ねぇ緋乃美ちゃんは？　何処行ったの！？　ねぇったら！
緋乃美ちゃんはぁ！！？
教えなさいよっ！　緋乃美ちゃん緋乃美ちゃん緋乃美ちゃん！！緋乃美ちゃんはぁぁぁ！！？」
ギュルン　と瞳が私を映し、怒りに燃えていた。
更に香緒の指に力が入る。
「っっ！」
痛い・・・熱い！
傷口が燃えるように熱く感じ、私は咄嗟に香緒の手を払い除ける。

「・・・？　だぁれあなた？」
「えっ！？」

香緒が心底不思議そうに私を見る。そこには何の感情もなく、警戒心すらもない。
私は香緒の変わりように息を呑む。

これは誰だ・・・？

私はふとそう思った。

だって、直感的に違うと思ったから・・・。
何時もの香緒ちゃんは強気で明るい、活発な子だ。
なのに今のこの子は儚く、私の様にか弱い感じがした。
そしてまるで緋乃美ちゃんのように何かに執着している様な、危なげな感じも・・・。

香緒は相変わらず無垢な表情で私を見つめる。

そこには敵意も好意も殺意も狂気も何もない。
何もない『無』だからこそ、何かに直ぐ染まってしまいそうで、怖い。

「・・・聞こえるよ。聞こえるよ。哀れな可愛い緋乃美ちゃんの声が・・・。」

「・・・！？」

「・・・どうして居ないの・・・？ねぇ緋乃美ちゃぁぁん・・・？

あ、れ・・・・そっかぁぁ・・・居なくて当たり前かぁ・・・。

だって

私が

殺したんだから

だよね？緋乃美ちゃん？」

今・・・何て言った・・・？

コロシタ・・・？

誰が・・・誰を・・・？

香緒は高揚とした気分でまだ何かを語る。
だが、何も私の中に入って来ない。
ただ、先程の言葉を頭の中で反復するだけ。
理解出来ないまま何度も反復して、頭をグルグルと回す。

コロシタ・・・コロシタ・・・コロシタ・・・？
香緒ちゃんが・・・緋乃美ちゃんを・・・？

殺した・・・？

「い、やあああああああああああああああああ！！！」

冷徹なる言霊（後書き）

ほんとに死んでんのかなぁ・・・？

おい作者　って感じですねぇ～・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3448z/

終わりは何時来るのか・・・（仮）

2011年12月29日15時50分発行